

tobimushi と共有の森事業

— 再びの共有化、地域での展開可能性 —

2010年1月14日
株式会社トビムシ
小林洋光





tobimushi

森は地域の宝もの

株式会社トビムシ

tobimushi Inc.

トビムシたちは、森林土壌の中にたくさん棲んでいます。

その数は、1平方メートルあたり数万から10万匹にもなると言われています。

ほとんどの人が存在することすら知らないトビムシたち。でも実は土壌中の有機物の分解プロセスにおいてとても重要な役割を担っています。トビムシたちが、落ち葉を食べて噛み砕き、糞を出すことで、バクテリアやカビなどの微生物が活性化するのです。

つまり、トビムシたちは、森の物質循環を支えています。

私たちは、人知れず森の循環を支えているトビムシたちのように、森を支え、そして森とともにある社会と人々の暮らしを支えいく存在になりたいと考えています。

ミッション：トビムシの存在意義

地域の眠れる資産を顕在化し、
森への期待を喚起し、
人々の連綿たる想いをつなぎ、
世の流れを創造する

ビジョン：人々の想い、世の流れの先にある、あるべき社会(会社)像

未来への想いがつながる社会、
子や孫のための営みが報われる社会、
「100年の森」があり続ける社会、
そうした社会を夢み、そうした社会創りを丁寧になす会社(仲間たち)



トビムシの視点

1. 「Community」 の再生

⇒持続可能社会を創造するには、 (Local) Community の (再) 構築が不可欠

2. 「Commons」 の再生

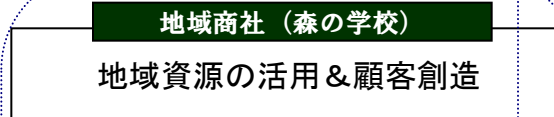
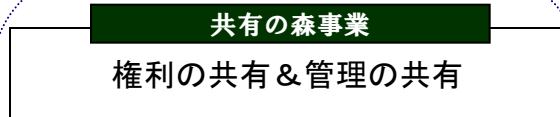
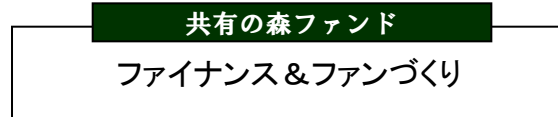
⇒ (Local) Community の (再) 構築には、Community 内における (再) 共有、Community 間の (新たな) 共有、その両者が不可欠

3. 「Communication」 の再生

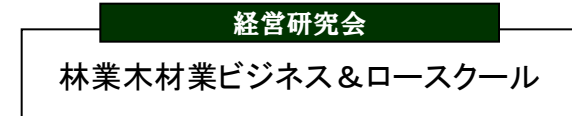
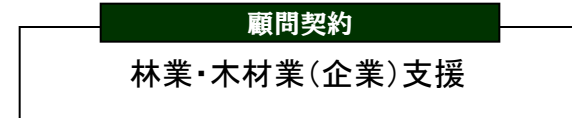
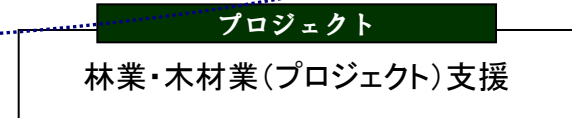
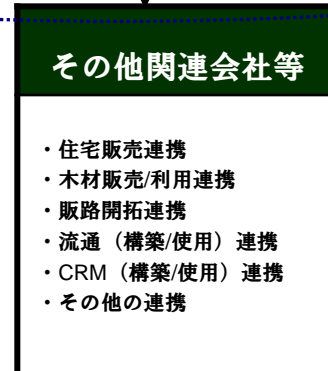
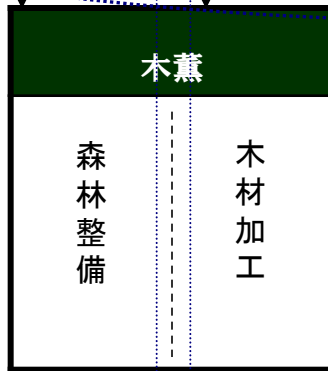
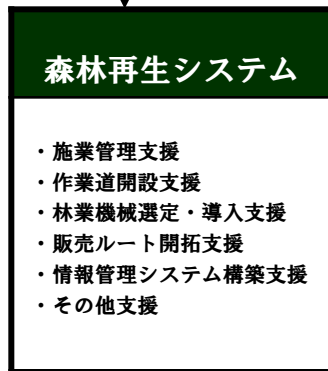
⇒ (Local) Community の (再) 構築には、個々の慣習、現象に捉われず、本来、本質を見極め、相互に理解する姿勢、機会が不可欠であり、そのためには、対面 (real) ・非対面 (virtual) の組み合わせによる、継続的 (同期的・定期的) な複数の媒介手段が必要

【共有の森事業:資産管理】@西栗倉

【共有の森事業:開発】



【地域コミュニケーション】



【施業管理】

【加工販売】

【コンサルティング】

共有の森事業とは

地域の特性（有形無形の資産）を丁寧に把握し、斟酌し、最大限活かしながら、森林・林業の再生を中心に、本来的な持続可能地域の創造を、地域と共に、地域の未来に想いを託す人と共に為す事業

西粟倉村

【小口集約型】

- ・役場中心に権利を取りまとめる
- ・森林組合との協同
- ・to B 出口開発・連携
- ・ファン(主に都市)の創造、連携

A町

【大口+小口合算型】

- ・大山主及び役場と協議を進展
- ・森林組合+αとの協同、連携
- ・to B 出口開発・連携
- ・既存ファンの有機的連携、発展拡大

B町

【流通集約型】

- ・山主をまとめている流通業者の連携
- ・役場はそれを後方・側面支援
- ・既存出口の有機的連携・発展拡大
- ・補完的に、ファンを創造、連携

その他

【都市近郊型】

- ・大手企業出口との連携が出发点
- ・役場はそれを後方・側面支援
- ・その他出口開発
- ・近郊都市との連携、ファン創造

施策目的	施策	施策詳細	実施プロジェクト	実施主体
効率向上	集団化	計画施業&作業道設置	共有の森事業	森林組合(&tobimushi)
		高性能林業機械の導入利用		tobimushi&森林組合
		施業技術向上・人材育成		tobimushi&森林組合&森林再生
	機械化	GISシステムの開発利用	GIS整備事業	役場(&森林組合)
品質担保	機械化	製材&乾燥機の導入利用	加工設備整備事業	役場&森の学校
出口 (channel) 開拓	高付加価値化 (間伐材)	無垢材利用	産直住宅(木の家)事業	森の学校(&tobimushi)
			工務店等連携@周辺市場	森の学校(&tobimushi)
			工務店等連携@首都圏他	tobimushi
			自治体での国産材利用PJ	tobimushi&自治体(外郭団体等)
	集成・合板利用	製材会社等連携	森の学校(&tobimushi)	
		自治体での国産材利用PJ	tobimushi&自治体(外郭団体等)	
		家具その他利用	DAIK-PJ他(EC含む)	森の学校&tobimushi
	利用促進 (切捨間伐材)	マテリアル利用	紙(材料)利用PJ	tobimushi & 森の町内会
		サーマル(エネルギー)利用	ペレット化and/orチップ化PJ	tobimushi
その他	CO2評価、活用	カーボンオフセット他	tobimushi	

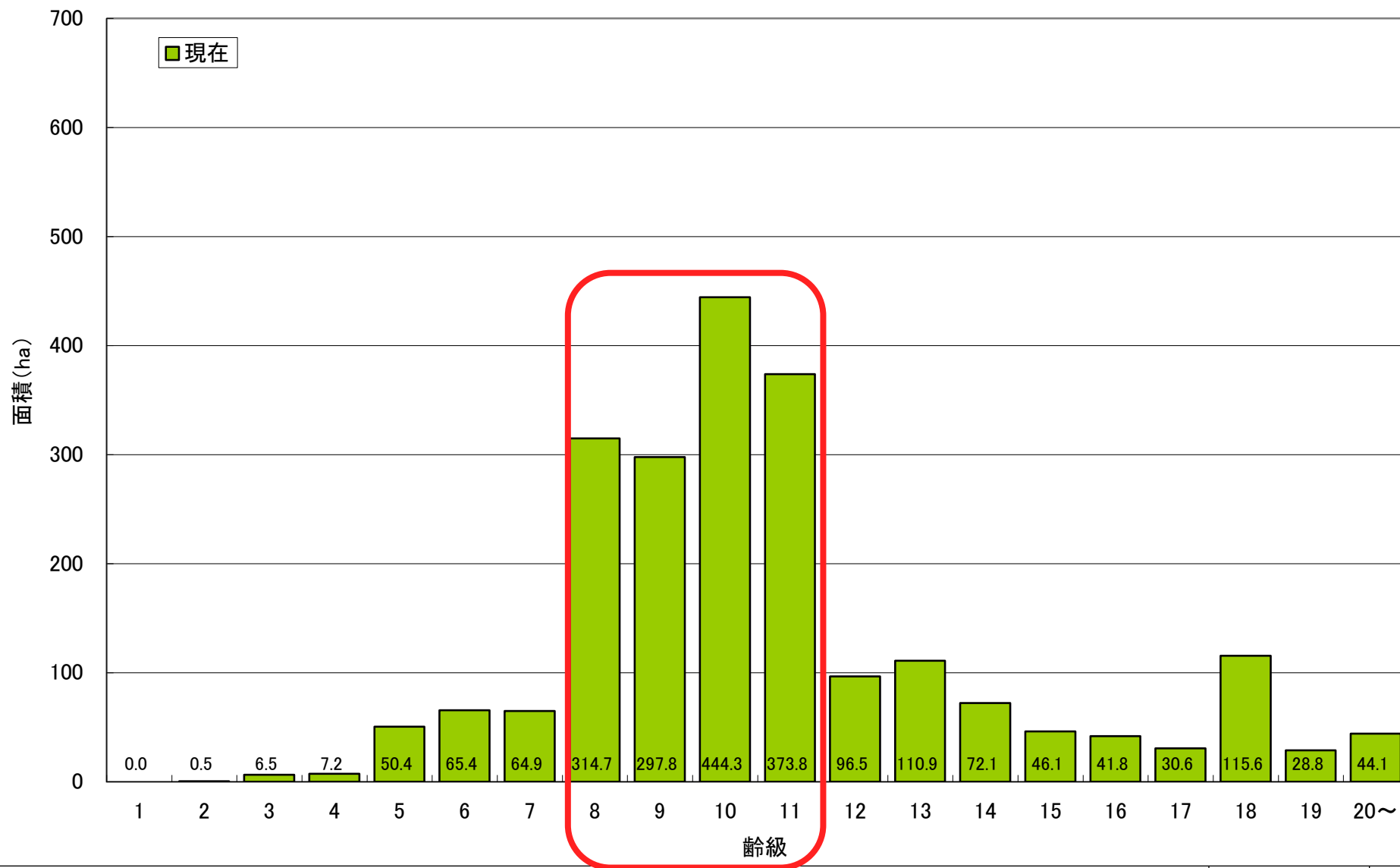
西栗倉村 百年の森林構想

■ 岡山県西栗倉村の概要

- ・ 人口約1600人の源流の村
- ・ 合併せずに自立の道を選択
- ・ 村の90%以上が森林
- ・ 林業従事者約30名
- ・ 大工、木工等の木の職人約30名



スギ齢級構成





最上流部には立派な
ブナの木が茂る若杉
原生林があります。



若杉原生林から少し下流に
おりたところに、樹齢100年を
超える立派なスギ人工林が
あります。適切な管理が100
年間にわたって継続された
理想の森林の姿がここにあり
ます。



40年から50年生を迎える人工林の多くが、このような状況です。枝打ちもされていってそれなりの手入れがなされてきたものの、ここしばらくは人手が入らずに暗い森林になってしまっています。

このような森の多くが、かつて採草地、つまり牛のエサを採るための草地でした。牛がトラクターに置き換わり、不要になった採草地を、価値のあるものとして次世代につなぐため、植林が行われました。

せっかくここまで育った森。そして、ここに木を植えた人々の想い。これらを、ここで捨ててしまうわけにはいかないのです。

過疎と高齢化が進むことで地域がだめになっていくのではないかと考えています。地域が捨ててはいけなものを捨ててしまったとき、過疎という悪循環から抜けられなくなるのではないのでしょうか。

■ 森づくりからはじまる上質な田舎づくり



森林はすべての源です。森からすべてが始まっていきます。



美しく豊かな森林は、美しく豊かな川を育みます。

西栗倉村の川には、今もイワナやアマゴがいます。オオサンショウウオも棲んでいます。

しかし、かつてほどの生き物たちの賑わいはありません。

百年の森林を育てていくことは、川の豊かさを取り戻していくことでもあるのです。



川の水は、徐々に温められながら、田んぼを潤します。よい水で育った稲は、美味しいお米を実らせます。

森があり、川があり、田畑あり、そしてそこで人々が暮らしている。そして、人を含めてたくさんの命がめぐりつづける。

地域とはそもそもそういうものであるということを、再認識していく作業が必要な時代になってきているのではないのでしょうか。

■ 限りある自然の恵みを大切に分かち合うために

四季折々の美しい風景、様々な山里の恵みがあります。

すべての源である森を再生していくことは、地域全体の美しさと豊かさを再生させていくプロセスです。

しかし、そこで得られるものは限りあるものです。

ほんとうに大切なものを、ほんとうに大切な人たちとの間で分かち合うということが、上質な田舎づくりであると考えています。



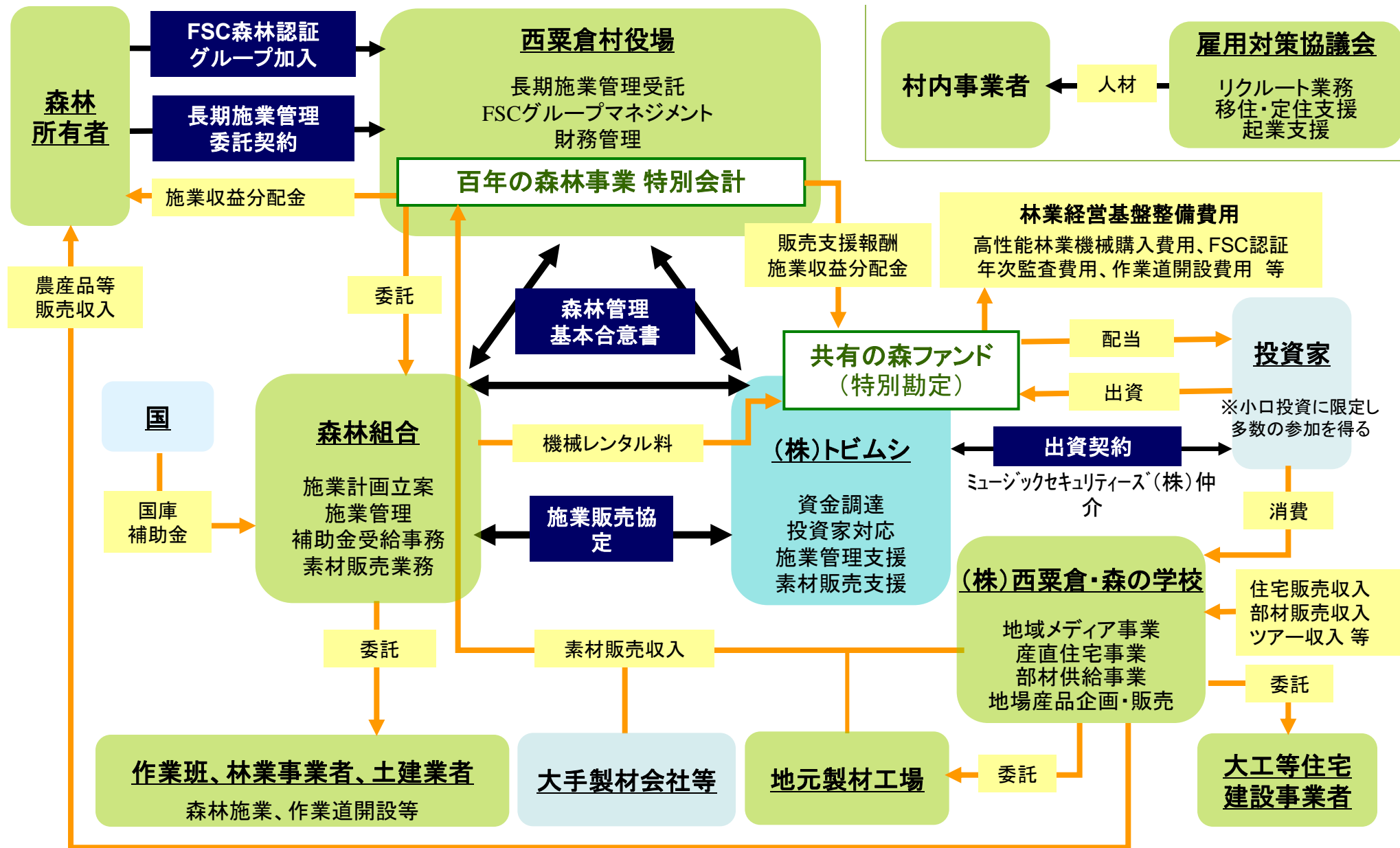
■ 西粟倉村挑戦者の集い

- ・ 「百年の森林構想」、森と地域の再生に取り組んでいる西粟倉村。
- ・ 過去2年間で31名のIターン者が村へ移住。
- ・ 既に5名の仲間たちが集い、昨年秋より、さらに3名の挑戦者が集う。



森林組合、森の学校、木薫、役場など、所属組織は異なれど、構想実現のための1つのチーム。

西粟倉村 百年の森林構想 (概要図)



共有の森ファンドとは

ファイナンスとは？

⇒特定事業（体）の特定目的実現に必要な資金の調達

自治体（中山間地域）にとってのファイナンス

⇒起債中心：過疎・辺地債による形式的・効率的ファイナンス

林業家（個人 and/or 法人）にとってのファイナンス

⇒借入中心：政策金融等による（形式的）効率的ファイナンス

しかしながら、「効率」的ではあっても、「効果」的ではない

これからのあるべきファイナンス像

- 単なる資金調達手段から、
社会的な関係性創りの重要な手段へ
- 金額は少なくとも（少ないからこそ）個人ひとり一人が、
特定目的の実現に向けた取り組みに営みに参加できる、
重要な手段へ
- 顔の見えないファイナンスから
顔の見えるファイナンスへ

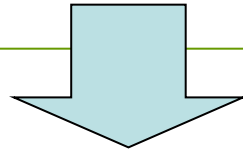
いまこそ、「再びの共有化」を

いままでは地縁でしかあり得なかったコモンズ（共有）、
それが、IT技術及び金融技術の発展を経た今だからこそ、
時間と空間を越えた、新たなコモンズの形成が可能に

共有の森ファンドとは、

新たなコモンズを創り、新たな経済（関係）を生み、
地域を、林業を、森とともにある人と暮らしにつなぐ
「架け橋」を創造する仕組み

- ・ リスクをとってまで地域に関わってくださる西栗倉ファン
- ・ 村が新しい商品やサービスを開発していくために、生活者としての声を聞かせてくださる方々
- ・ よい商品やサービスを、真っ先に案内をさせていただく方々



投資家のみなさま＝ともに創りそして分かち合う方々

税金は意志に関係なく徴収されますが、投資はその人の意志にもとづいて動くお金。村の取り組みに共感し、意志をもってサポーターとなってくださる方々と、ともに創り分かち合うことを目指します。

■ 新しい投資家像（西栗倉の場合）

投資家として参画していただいた方々は、トビムシのように、森の循環の中で暮らす森のメンバーであり、西栗倉村にとっては第2の村人であると考えています。



地域商社（森の学校プロジェクト）

地域資源の活用および地域と都市における顧客創造を主体的に為し、発信することで、

これまで都市に委ねてきた販売機能を自前化する事業

：中央（都市・大手企業その他中央組織）の単なる仕入先というポジションからの脱却

- ・ 農山漁村の多くは、大量生産・大量消費型の流通・物流の発達によって大手企業、中央組織（農協等）の単なる仕入先になっている。
- ・ 仕入先というポジションから脱却して、売り手として主体的にマーケティングを行うことがなければ、ただ安く買い叩かれるという状況から脱却することはできない。
- ・ 一方で地域の魅力を発掘して地域づくりを進めていくという運動は、「地元学」などの名で実施されてきたが、それらはあくまで運動であって、ビジネスに発展することはなかった。
- ・ しかし、地域内の事業者が個別にマーケティング活動や商品開発を積極的に行うことは能力的にも経営余力的にも困難である。
- ・ そのため、「地域資源を活用し村の顧客を創造する地域商社」の設立より、都市に委ねてきたマーケティング機能を自前化する作業が、過疎・高齢化の悪循環から脱却するためには、不可欠であると考えられる。

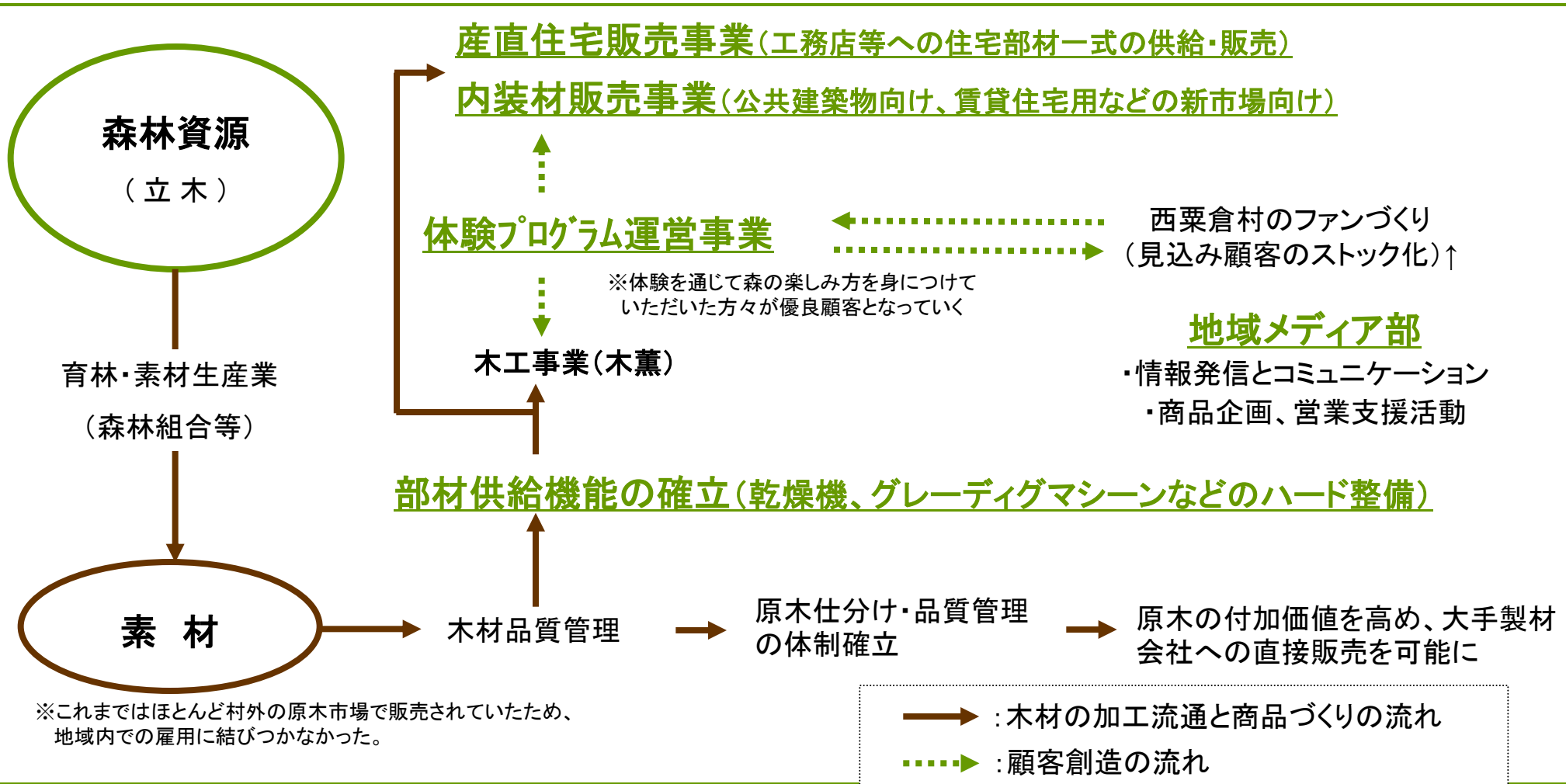
■ 地域の営業本部、西栗倉・森の学校（概要）

- ・ 「森と木と暮らしの博物館」として、廃校になった小学校をリニューアルし、オフィス兼展示場として活用します。
- ・ 森の学校は、地域資源を活用し村の顧客を創造する地域商社です。
- ・ 平成21年10月1日に株式会社を設立し、平成22年4月より本格的に事業を開始します。
- ・ 未利用の地域資源の中で、特に木材の販売に注力し、百年の森林構想の実現に資することを目指していきます。
- ・ これまで原木のまま安値で販売されていた木材を、住宅部材等に加工して付加価値をつけて販売し、地域経済の活性化と雇用の創出を図ります。



■ 西栗倉・森の学校の事業概要

- 森に関わる村内の様々な事業主体が互いに協働しながら、顧客づくりと商品づくりを推進し、西栗倉村が木の里としての総合力を発揮できるようにしていくことで地域雇用を創造していかなくてはならない。
- そこで森の学校は、森について楽しみながら学び考える場づくりを通じて、西栗倉村の森と人々の生活とをつないでいくために、以下のような仕組みを総合的にプロデュースしていく。



■ 産直住宅（西栗倉・木の家）事業

- ・ 現在モデルハウス2棟、実物大木組みモデル1棟の合計3棟を西栗倉産木材で建設中。
- ・ 乾燥機、モルダー、グレーディングマシーン、ストックヤードなどのハード整備を今春には完了する予定。
- ・ 旬伐り、伝統工法、自然乾燥にこだわった家づくりを目指している。
- ・ 産直住宅事業と連動しながら、内装材（主に板類）の販売事業について事業化の準備を進めている。



■ 体験プログラム運営事業

- ・ 西粟倉村を楽しみ味わい村のファンになっていただくため、体験プログラムを実施している。
- ・ 共有の森ファンドメンバー（投資家様）限定の「西粟倉源流の森ツアー」等の企画運営も行っている。



- ウェブの管理運営、各種販促物の製作、イベント集客などを行うことを通じて、西栗倉ファンとのリレーションシップマネジメントを担うのが、地域メディア発信事業です。



地域地域の有する特性を丁寧に抽出し、素材を再編集すること
(=資産価値の見える化)

地域（森林・林業、自治体等）と都市（都会に住まう人々、都市部の自治体、大手企業等）の関係性を再構築すること
(=再びの共有化)

生産者（山＝中山間地域）の立場から価値を伝え続けること
(=持続可能な顧客創造)

⇒森林・林業振興を切り口とした、新しい持続可能地域市場の拡大と創造に寄与すること